

「オネエ所長の調査ファイル」 # 1 1

山崎浩治

1

「トオルちゃんは外食ばかりでしょ？ その点、あたしは料理好き。しかも、トオルちゃんは賃貸暮らしの貧乏青年で、あたしは分譲マンション住まいの一人暮らしよ」

「何が言いたいんです？」

「あたしたち、一緒に暮らすとうまくいくと思うのよね」

「思いませんよ！」

「ルームメイトがダメなら愛人未満、夫婦以上の関係でもいいわ」

「何ですか、それは？」

「セックスフレンドになろうってこと」

「お断りします！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が金沢市繁華街近くにある小料理屋で熱燗をちびちび飲んでいる。市山はカツラの長い髪を後ろで束ね、細身のパンツスーツをきりりと着こなす。会社帰り、若い部下を従えてやってきたキャリアウーマン、という設定の女装なのだろう。二人は「夫が家を出て、愛人と暮らしている。もう我慢できない」という専業主婦・悦子(62歳)の依頼を受けて、この店を張り込み中なのだった。

依頼人の夫、修(66歳)は社員数十名の会社を営んでいたが、後継者難から3年前にM&Aで会社を売却。隠居生活を送るうち、行きつけの小料理屋の女将とねんごろになり、1年前に家を出た。その小料理屋がいま二人のいる「りえ」なのだ。

白木のカウンターの中にいる女将の理恵(45歳)は着物に割烹着をつけた小粋な美人だった。客の出入りはそこそこあって、大きな儲けはないにせよ、黒字は出ているように見える。料理はさほど凝ったものではないが、酒にもご飯にも合うようにほどよく味付けされていて、「美人女将と味」が人気の秘密のようだった。

「このブリ大根、とってもおいしいわ。味付けは企業秘密？」

市山が尋ねると、理恵が柔らかく微笑んで答えた。

「そんな大それたものじゃありませんよ。ザラメを使っているんです」

閉店間際、勢いよく引き戸が開き、鷹揚とした気配を漂わせる初老の紳士が現れた。修である。会計を済ませて店を出た市山と透が近くの植え込みの陰に隠れるとほどなく、店じまいした理恵と修が表に出てきた。修の運転する車で向かったのは金沢駅近くにある修名義のマンションだった。

「不倫関係だというのに、堂々としたもんですね」

エントランスに消えていく2人を見送った透がつぶやくと、市山が言った。

「年配の男は案外、浮気を隠さないものよ。ジタバタ隠蔽工作するのは若い男」

2

数日後、悦子が「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスを訪れた。女友達との食事会帰りとかで、華やかな裕の訪問着に履き物、バッグと高級品で全身武装した、絵に描いたような有閑マダム姿である。ダンディーなスーツ姿で迎えた市山が調査内容を報告する。

「ご主人はあなたの予想通り、マンションで愛人と夫婦同然の生活を送ってた。浮気の証拠はバッチリ押さえたわ。念のために聞くけど、離婚を考えてる？」

悦子が嘲るように笑った。

「夫には会社を売却したお金も含め、数億円の預金があるのよ。離婚して慰謝料を請求したって、その半分も取れないでしょう？ しばらく待ってれば、いずれ夫は死ぬわ。黙っていても財産の半分が私のものになるのに、離婚なんてばかばかしい！」

悦子には毎月、修から30万円の生活費を送られていた。それでも足りない時はさらに小遣いを無心しているらしかった。

「それじゃ、このままご主人の浮気を黙って見過ごすわけ？」

「あの人の浮気はいまに始まったことじゃないのよ。私は浮気が発覚しても追及なんかせず、買い物で復讐することにしてるの。いま着ている加賀友禅だって昔、夫の浮気中に買ったもの。今回も留袖やダイヤのネックレスを買ったって、何も文句を言わないはずよ」

「あたしは派手に夫婦げんかする方が好きだけどな。それであなたは買い物で復讐するだけで満足できるの？」

「愛人は40代半ばの女。どうせ金目当てに決まってる。そのうち夫の熱も冷めていくでしょう。どのみち愛人では、夫の財産を相続できないし。最後に笑うのは私なんだから」

悦子は小1時間、夫と愛人へ恨みつらみを並べ立てると、すっきりした顔でオフィスを後にした。修がガンで急死したのはその1年後である。検査でガンが見つかり、開腹したところ、どこが原発か分からない状態で手の施しようがなく、手術後あっけなく逝った。

悦子は「いまさら盛大な葬式を挙げてもし方がない」と夫の葬式を簡略な家族葬で済ませると、理恵に対し、マンションの明け渡しと慰謝料を請求する調停の準備に取りかかった。しかしその矢先、修名義のマンションを「理恵に贈る」という遺言状の存在が明らかになった。

3

会社を売却し、悠々自適の生活といえは聞こえはいいが、無為な日々を送っていた。悦子は稽古事や趣味のサークルで忙しく、日中はほとんど家にいない。「あなたが社長をリタイアするなら、私も専業主婦を定年」が口癖で、食事は冷凍食品か総菜、インスタントのみそ汁を出して平気な顔をしている。

そんなわびしさが理恵の店に引き寄せたのかもしれない。業界仲間に教えられ、通うようになった「りえ」は会社から自宅に帰る前にちょっと立ち寄る気の置けない小料理屋だった。女将の理恵はワケアリの女性らしく、自分のことはほとんどしゃべらない。夫が病気で早死にし、その保険金で店を開いたというのが常連客たちの見立てだった。

季節を感じさせる理恵の料理を目当てに通っているうち、カウンター越しに他愛ない世間話を

するようになり、ひよんなきっかけで男女の関係になったのは、客のいない嵐の夜だった。それからあれよあれよという間にのっぴきならない関係になっていく。

これまで女遊びはさんざんやってきたが、理恵とは遊びではなかった。社長として30年間、ことさら楽しいこともなく、家族のため社員のため黙々と働いてきた。後継者に期待した長男は安定した生活を求めて公務員となり、長女も県外のサラリーマンに嫁いで、それぞれ大過なくやっている。

仕事も家庭もやるべきことをやり終えた自分にとって、理恵は神様から贈られたご褒美のように思えた。残りの人生、元気に過ごせるのはせいぜい、あと10年ぐらいのものだろう。それなら好きにさせてもらおう。そう腹をくくって、修は家を出たのだ。

暮らし始めて1年目の記念日、指輪をプレゼントした。気持ちは「結婚指輪」だった。さして高価なものではなかったが、理恵は涙を浮かべて喜んでくれた。その直後、ガンが見つかった。指輪が最初で最後のプレゼントなんて理恵が哀れ過ぎる。せめて自分名義のマンションくらい残してやろう。妻や子供たちは非難するだろうが、それにひるむつもりはない。一番愛する人に財産を残すのは当たり前のことだった。

4

「愛人は法律上の相続関係ではないから、遺産は一銭もいかない。だけど、ご主人は遺言によって相続人ではない彼女にも財産を残そうしたわけね」

修の遺言状のコピーを携えて「金沢プライベート・リサーチ」に相談にやってきた悦子に、市山が冷静に言った。

「でも、夫が残していたのは自筆遺言でしょ！ あの女が偽造したものかもしれないじゃない！
そもそもあのマンションは夫が死んだら人に貸そうと思ってたの。こうなったら私、出るころに出て戦うわ！」

悦子が目をとがらせて気色ばむ。

「弁護士さんとよく相談して対応すればいいけれど、ご主人の自筆証書遺言のコピーを見る限り、法律に定められた通りに作成してあるわ。ご主人の筆跡に間違いなさそうだし、これを偽造と主張するのは難しいんじゃないかしら」

「そ、そんな……」

「しかも愛人に遺贈した財産は、あなたやお子さんたちが相続する財産の遺留分も侵害していない。仮に調停を申し立てても、厳しい戦いになることは覚悟した方がいいわよ」

「妻である私が愛人ふぜいに負けるというの！」

「あのね、ご主人は愛人に遺言を残したけれど、あなたには一言もない。その意味をよく考えて」

「……」

「こんなことわざを知ってる？ ウサギを捕まえる時は耳を捕まえろ。猫の時は首根っこ。そして男を捕まえる時は心を捕まえろ、ってね。あなたは妻の座にあぐらをかいて、ご主人の心を捕

まえようとしなかったんじゃない？」

返す言葉に詰まった悦子がムスツとした顔でそっぽを向く。市山が追い打ちをかけるように続けた。

「あなたは相続のソロバン勘定から、愛人の存在を見て見ぬをふりをした。その瞬間、あなたはご主人の心を放棄してしまったのよ」

5

修が残した主な財産は自宅の土地建物に預金約5000万円、30台分の月極駐車場とマンションだった。協議の結果、長男と長女に相続放棄させ、悦子が遺産を相続。マンションは悦子が弁護士を立てて調停に臨んだものの、遺言通り、理恵に遺贈された。市山と透が「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで調査を振り返っている。

「数億あったはずの預金が5000万円とは……愛人に贈与したとしか思えませんね」

「数億円というのは依頼人の希望的観測に過ぎないわ。本当にあったか疑わしいとあたしはにらんでる。仮にあったとしても、金遣いの荒い依頼人が食いつぶしたというのが真実じゃなくて？」

「いずれにしろ、依頼人は夫からとんだシッペ返しを受けたわけですね」

「夫は30台分の駐車場収入も妻に残しているのよ。依頼人は遺族年金もあるし、何不自由なく老後を暮らしていけるわ。夫としての責任は十分果たしていると思うけどね」

それから1年後、悦子が脳梗塞で通れ、幸い命は取り留めたが、左半身に軽いまひが残った。いまはヘルパーが週に数日訪問し、買い物や調理、洗濯といった家事を代行しているという。

白いワンピースに10分丈のレギンス、ヒールパンプスという秋の装いになった市山と透が悦子の様子を見に行くと、悦子の家は周囲に生け垣を巡らせた古風なたたずまいの大邸宅だった。修が会社を売却した際、工務店に依頼して水回りを2階に引いている。簡単なリフォームで2世帯住宅の暮らしができるようにしたのだが、地元にいる息子夫婦は悦子が倒れた後も月に1度ほどしか顔を出さず、疎遠な親子関係を窺わせた。修の生前から悦子が長男の家に頻繁に押しかけて、長男の嫁と関係を悪化させたのが原因らしい。親しい友人には「近々、高級老人ホームに入居して優雅に暮らすわ」と吹聴しているようだ。

その帰り道、「りえ」の暖簾をくぐると、店内はほぼ満席で、相変わらず繁盛していた。カウンター席の隅に腰をおろした市山の前に、割烹着姿の理恵が「お好きでしたよね」と湯気の立つブリ大根を盛った器を置く。2度目の来店にもかかわらず、理恵は市山の好みを覚えていた。こうした細やかな心遣いが修の気持ちを捕らえたに違いない。

割烹着の下は、着道楽の悦子とは対照的に地味な縦縞の紬だ。おそらく古着だろう。水仕事をする左手の薬指には結婚指輪がはめられている。ブリ大根をほお張りながら、彼女のなかで修はまだ生きていたのだろう、と市山は思った。